広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第59号　2010　345－352

韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識

― 韓国剣道大学選手との比較から ―

金　炫　勇

（2010年10月７日受理）

A Research into How Korean National Athletes of Kendo Perceive Kendo
― A comparison with Korean university Kendo players ―

Hyun Yong Kim

Abstract: The purpose of this study is to examine how Korean national Kendo athletes perceive Kendo compared with how Korean university Kendo players perceive it. The subjects of this study were 100 Korean university Kendo players all of whom are male and whose average age is 22.0±2.03 years old and 11 Korean national Kendo athletes all of whom are also male and whose average age is 28.5±3.04 years old. According to many previous studies, the more an athlete has experience of kendo, the more he perceives it as a martial art rather than as a sport and the more positive is his attitude in general to Kendo. As a research method, I used a research methodology developed by the national educational federation of Japan in 1993. The result of my research displays a significant difference between Korean national Kendo athletes and Korean university Kendo players. In particular, it shows that Korean national Kendo athletes perceive Kendo as a sport and that they show a higher degree of interest in Kendo and a more positive attitude to it than compared with Korean university Kendo players.

Key words: Kendo experience, Korean national Kendo athletes, perception
キーワード：剣道経験，韓国剣道ナショナルチーム選手，韓国剣道大学選手，意識

１．目　的

韓国において，剣道は警務庁（1896）や陸軍研成学校（1904）の撃剣教育として日本から導入されて以来，学校体育の正課科目（1911）や必修科目（1927）になり学校体育として定着した（Kim，1999）。しかし，戦後，反日感情が高まり，日本の文化や教育が除外される中，剣道も公立学校の学校体育から除外されることになった（大韓剣道会，2003）。

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：松尾千秋（主任指導教員），黒川隆志，東川安雄，林　孝，草間益良夫

その後，オリンピックや世界大会などが海外に韓国を知らせる第一政策として捉えた朴正熙政権（1962～1979）により「体育特技者制度（1972）」が法案化され，剣道は再び学校体育の種目として復活した。「体育特技者制度」とは，小学校を卒業した段階で，国が体育人材を発掘し支援する制度である。

そして，韓国の剣道は1988年のソウルオリンピックを契機に大きな転換期を迎えた。即ち，国民の生活体育の振興を図る「国民生活体育振興総合計画（1989）」の導入とともに，国民の体育に対する興味・関心が高まる中，その波に乗った剣道界は急成長を成し遂げた（朴，2010）。韓国の文化体育観光部の調査（2008）によると，その成長ぶりは格闘技団体の中でも一番著しく，2006年には剣道人口は60万人に達し，また，私設

道場が1,000を超えている。

一方，大韓剣道会会報84号（2010）によると，1990年以降，私設道場を中心として急激に増加した剣道人口は，最近，剣道離れや剣道人口の減少などが問題となっているが，「学校剣道（授業）」においては，剣道の教育的価値が注目される中，学校体育として剣道授業を行なっている学校が徐々に増えている。

このような傾向に対し，1970年に「国際剣道連盟（FIK）」を発足させた剣道界では，1980年代から欧米を中心として海外に普及された剣道がどのように変容しているかを調査するため，剣道に対する実態や意識調査を始めた（安藤ら，1981；山口ら，1983）。その結果，欧米の剣道家たちは，剣道を武道として捉え，剣道に精神的な価値を求めていた（安藤ら，1981；軸原ら，2005；植原，2005；金義信，2009）。また，精神修養，道徳教育，姿勢矯正など剣道の教育的価値に着目した欧米では，学校体育に剣道授業を取り入れて試みる学校も徐々に増えている（Honda, 2009；酒井，2009）。

一方，日本の剣道界においては，1990年代から青少年の剣道離れや剣道人口の減少が大きな問題となり，1992年に全日本剣道連盟の依頼を受けて，全国教育系大学剣道連盟研究部会が日本の青年（高校生と大学生）を対象に大規模な意識調査を行った。その結果，日本の青年は剣道をスポーツ的にも武道的にも捉えていた。しかし，剣道経験が長くなるほど武道的に捉えるようになり，剣道で言われる一般的な事柄や剣道の教育的効果（人格形成，礼儀作法，姿勢など）について肯定的に捉えていることが明らかになった（草間，1993）。

韓国において，剣道に対する意識をテーマとした研究は剣道人口が急激に増加し始めた1990年以降から見られる。しかし，そのほとんどの研究は，私設道場を中心とした「国民生活体育剣道」を対象にしたものであり，「学校剣道」を対象にしたものは少ない。また，「国民生活体育剣道」を対象とした先行研究では，私設道場を中心とした剣道家たちが対象であり，彼らはそもそも剣道をスポーツ的に捉え，剣道から健康促進，楽しみ，ストレス解消，ダイエット効果などを求めている（Sin，1984；Jeng，1992；濱田ほか，2004）。

一方，韓国の「学校剣道」を対象に経験度に分けた先行研究（金，2007）では，剣道をスポーツ的にも武道的にも捉えているが，剣道授業を受けた者や剣道を定期的に行っている者は剣道を武道的に捉え，剣道から人格形成，礼儀作法の涵養，姿勢矯正などが期待されると捉えており，その傾向は剣道の経験が長くなるほど肯定的であった。

濱田ほか（2004）は，韓国人と日本人の剣道家たちを比較研究し，韓国の剣道家は日本の剣道家に比べ，技能レベル（経験年数，段位）が低く，剣道をスポーツ的に捉える傾向があると報告している。しかし，韓国の剣道家においても技能レベルが高くなるほどスポーツ的志向から武道的志向になる傾向が見られたと報告している。

Park（2005）によると，個人はスポーツを通して，その集団の構成員が共通的に持っている価値観・態度・信念・意識などを集団内の他の構成員との相互作用を通して自分の経験やレベルに合わせて認識していくものである。個人の意識が集団の価値観・信念などの影響を受けるとすると，「学校剣道」を卒業し，勝利や結果が求められる実業団に入団した選手たちの意識はどのようなものであるのか。韓国における実業団選手の剣道に対する意識に着目した研究は管見の限り見当たらない。そこで，本研究においては，「学校剣道」の更なる発展策を検討する資料を得るため，「学校剣道」の最高目標の一つである韓国剣道ナショナルチーム選手（以下，ナショナルチーム選手）の剣道に対する意識の実態について明らかにすることを目的とした。

2．方　法

2.1．調査対象

本研究では，ナショナルチーム選手の剣道に対する意識の実態について検討するために，「学校剣道」の最終段階である大学選手を比較対象とした。ナショナルチーム選手たちは，2009年の「第14回世界剣道選手権大会」への出場が決まった12名の韓国代表であり，本調査にあたっては，コーチや監督の承諾を得て回答を得た。調査総数12名から「未記入，記入ミス等」除外した11名を対象に結果をまとめた。

また，ナショナルチーム選手と比較した大学選手は，韓国のソウル，釜山，仁川，大邱，光州，龍仁などの大学に在学している大学選手であり，2009年にそれぞれの大学に依頼し，回答を得た。調査総数120名のうち，未記入，記入ミス等を除外した100名を調査対象とした。その内訳は表１の通りである。

表１　調査対象

群	サンプル数(名)	平均年齢(歳)	経験年数(年)	平均段位(段)
ナショナルチーム	11	28.5±3.04	15.4±1.4	4.4±0.69
大学生	100	22.0±1.03	6.9±3.6	3.5±1.64

2.2. 研究方法

草間らの全国教育系剣道連盟研究部会（1993）により作成された調査票を基に韓国版を日本語検定試験一級の者が翻訳した調査票により作成し，調査を行った。11視点と32質問内容は，日本の全国教育系剣道連盟研究部会が1993年に行なった２回の予備調査と全剣連の「剣道の理念」「剣道修練の心構え」「武道憲章」の文章の中の語句を検討し，全国教育系剣道連盟研究部会のメンバーによって決定されたものである。その11視点は表２の通りである。

2.3. 分析方法

回答を５段階の選択方式から選択させた。回答されたそれぞれの番号（「１．そう思わない」,「２．あえていえばそう思わない」,「３．どちらともいえない」,「４．あえていえばそう思う」,「５．そう思う」）を得点として換算し，各群の平均得点と標準偏差を算出した。統計分析はエクセル2007（マイクロソフト社）の分析ツールを用いて行ない，平均得点の群間の差についてはｔ検定を行った。

３．結果ならびに考察

ナショナルチーム選手と大学選手の剣道に対する意識について，統計処理した結果を表２に示した。

3.1. 剣道はスポーツか武道か

「剣道はスポーツの一種目だ」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた($p < 0.001$)。「剣道はスポーツではなく，武道だ」という項目については，大学選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.001$）。先行研究によると，剣道の経験が長くなるほどスポーツ的志向から武道的志向になる傾向が見られる（草間，1993；濱田ら，2004；軸原，2005）。しかし，本研究においては，大学選手が剣道を武道的に捉える傾向がより高いのに対して，ナショナルチーム選手は，剣道をスポーツ的にも武道的にも捉えているが，スポーツ的に捉える傾向がやや高かった。このことは，ナショナルチーム選手のほとんどは実業団のプロ選手であり，大会の結果により技能レベルを評価され，契約更新などに影響を及ぼすことから，勝利にこだわり，スポーツ的に捉えるようになってきたのではないかと考えられる。

これは，剣道を武道として教えている大韓剣道会や「学校剣道」の指導方針とは異なる結果であり，実業団に入ってから勝利をより強く求めるよう変容したものと考えられる。

3.2. 剣道における人間形成

「剣道を続けていると，日常生活でも礼儀正しくなる」,「剣道を続けていると，良い姿勢が身につく」,「剣道を続けていれば，社会につくそうとする考えを持つようになる」,「剣道を長年にわたって続けている人は，誠実で信頼できる」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p< 0.001$，$p < 0.01$，$p < 0.05$，$p < 0.05$）。しかし，「剣道を続けている人は，自分自身に厳しくしっかりしている」という項目については，有意差は見られなかった。

国際剣道連盟（FIK）による「剣道修練の心構え」には，「剣道を正しく真剣に学び，心身を練磨して，旺盛なる気力を養い，剣道の特性を通じて，礼節を尊び，信義を重んじ，誠を尽して，常に自己の修養に努め，以って，国家社会を愛して，広く人類の平和に寄与しようとするものである」とある。また，大韓剣道会は「剣道修練上の具体的な実践方法」として，「道場の３礼」，すなわち，「国旗に対する礼，先生や目上の人に対する礼，仲間に対する礼」を重視している（申，1984；Park，2005）。また，韓国の新羅時代からの教えである『花郎五戒』，すなわち，「事君似忠（忠），事親似孝（孝），交友似信（信），殺生有擇（仁），臨戦無退（勇）」などを剣道愛好家が持つべき心構えとして強調している（朴，1996；金，1999；Park，2005）。しかし，先行研究（Park，2005；金，2007）によると，剣道は礼儀作法，正しい姿勢などには影響を与えるものの，誠実さや信頼度といった内面的なこと及び社会に貢献しようとする人類愛には影響を与えないと捉えている（大石ほか，2004；Park，2005；田中，2007）。

本研究において，ナショナルチーム選手は，剣道が姿勢や礼儀作法のみならず，誠実さや信頼度もやや肯定的に捉えている。このことは，ナショナルチーム選手が国の代表に選ばれることにより生まれた剣道に対する心構えなどが影響を与えた結果であると考えられる。

3.3. 剣道の技能特性

「剣道では高齢者と若者とが対等に競い合える」,「剣道では気力よりも体力が重視されている」,「剣道では気力よりも体力が重視されている」という項目については，ナショナルチーム選手は有意に否定的な意識を抱いていた（$p < 0.01$，$p < 0.05$，$p < 0.05$）。また，「剣道では技術よりも気力が重視されている」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$）。

一般にスポーツ競技力は筋力，持久力，瞬発力などの体力要素に大きく影響を受ける。そのため，基礎体力が加齢現象に伴って低下すると，その競技から離れ

表２　剣道に対する意識（韓国ナショナルチーム選手と大学生剣道選手の比較）

11 視点	32 項目	ナショナルチーム選手 (n=11)	大学選手 (n=100)	有意差
1. スポーツか武道か	剣道はスポーツの一種目だ	3.45±1.21	3.18±1.52	*
	剣道はスポーツではなく,武道だ	3.64±1.36	4.09±1.08	*
2. 人間形成	剣道を続けていると,日常生活でも礼儀正しくなる	4.73±0.65	3.82±1.34	***
	剣道を続けていると,良い姿勢が身につく	4.45±1.36	3.90±1.22	**
	剣道を続けている人は,自分自身に厳しくしっかりしている	4.00±1.18	3.79±1.20	n. s.
	剣道を続けていれば,社会につくそうとする考えを持つ	3.55±1.13	2.95±1.25	*
	剣道を長年にわたって続けている人は,誠実で信頼できる	3.64±1.29	3.31±1.36	*
3. 技能特性	剣道では,高齢者と若者とが対等に競い合える	2.45±1.75	3.41±1.46	**
	剣道では,技術よりも気力が重視されている	3.91±1.30	3.37±1.24	*
	剣道では,気力よりも体力が重視されている	2.64±1.50	2.86±1.28	*
	剣道では,技術よりも体力が重視されている	2.36±1.29	2.87±1.31	*
4. 技能向上と鍛錬性	剣道の上達のためには,厳しい練習が不可欠だ	3.36±1.50	3.91±1.27	*
	剣道の技術は,誰にでもすぐに体得できる	1.82±1.08	2.54±1.38	**
	剣道の厳しい練習を乗り越える人は限られた有能な人だけだ	1.91±1.58	2.47±1.34	*
5. 雰囲気	剣道の道場は,気持ちが引き締まるような雰囲気を保つべきだ	4.55±0.93	3.49±1.27	***
	剣道の試合では,鳴り物によるにぎやかな応援を認めるべきだ	3.45±1.37	2.98±1.44	*
	剣道を続けている人は,堅苦しい雰囲気がある	2.36±1.36	2.46±1.31	n. s.
6. 上下関係	剣道を行なう人は,年齢の上下関係を重視している	5.00±0.00	4.16±1.25	***
	剣道を行なう人は,段位の上下関係を重視している	4.09±0.83	3.53±1.30	*
	剣道を行なう人は,身分の上下関係を重視している	3.09±1.81	3.15±1.45	n. s.
7. 伝統的教えや習慣	剣道の教えや理論は古くて理解できない	3.00±1.34	2.58±1.46	*
	剣道の伝統的な気風や習慣はそのまま伝承すべきだ	4.55±0.52	3.54±1.36	***
8. ルール	剣道の有効打突（一本)の判定は,観る人にとってわかりにくい	2.73±1.35	3.17±1.29	*
	剣道のルールは,難しくて理解できない	1.82±1.08	2.44±1.24	**
9. 普及策	剣道をオリンピック種目にするように働きかけるべきだ	4.91±0.30	3.52±1.49	***
	剣道は子供の時代から多くの人たちに広めていくのがよい	4.55±0.82	3.34±1.34	***
	剣道をもっと外国に広めていくべきだ	5.00±0.00	3.84±1.28	***
10. 安全性	剣道は怪我が少なく,安全だ	2.36±1.57	2.94±1.30	*
	剣道での打ち合いは,痛みが強く危険だ	2.09±1.30	2.57±1.35	*
11. 興味・関心	剣道の有段者（または高段者）になってみたい	4.55±0.93	4.10±1.30	*
	剣道の試合は観る人をひきつける	2.64±1.63	3.19±1.38	*
	剣道を続けたい	4.73±0.65	4.14±1.32	**

*：$p < 0.05$，**：$p < 0.01$，***：$p < 0.001$

ていく傾向がある（大石ほか，2004)。しかし，剣道の場合には，その競技力は体力のみに頼ったものではなく，精神力や長年の経験によって蓄積された勘やコツが重要である。そのため，剣道では「気力，技術，体力」の順に重視していると考えられる（草間，1993；大石ほか，2004)。

また，このような剣道の特性によって，剣道では老若男女が対等に競い合えるところが大きな魅力のひとつであるともいわれる（酒井ほか，1999；大石ほか，2004)。このような剣道の特性が剣道の継続要因の一つであり,生涯スポーツともいわれる理由でもある(酒井ほか，1999；大石ほか，2004)。

今回の結果では，ナショナルチーム選手は「剣道では，高齢者と若者とが対等に競い合える」という項目に対して否定的に捉えていた。このことは，ナショナルチーム選手が，実業団の価値観である勝利主義や満36歳で引退を余儀なくされる実業団の厳しい現実などから影響を受けた結果であると考えられる。

3.4. 技能向上と鍛錬性

「剣道の上達のためには，厳しい練習が不可欠だ」という項目については，大学選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた($p < 0.05$)。また,「剣道の技術は，誰にでもすぐに体得できる」と「剣道の厳しい練習を乗り越える人は限られた有能な人だけだ」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に否定的な意識を抱いていた（$p < 0.01$，$p < 0.05$)。

先行研究によれば，剣道はすぐに体得できるものではなく，時には厳しい修練が必要であり，経験が長くなるほど剣道の上達のためには長い年月がかかると捉えている（草間, 1993；金, 2007)。また, そのことが, 剣道の継続要因の一つでもあるとされる（酒井ほか, 1999；大石ほか，2004)。

今回の結果では，両群ともに，剣道の技能向上は容易なものではなく，厳しい練習を伴うものであると捉えていた。また，その厳しい練習は有能な人だけが乗り越えられるものではないと捉えていた。しかし，技能向上の厳しさについては，大学選手の方がより肯定的に捉えていた。このことは，大学選手を取り巻く日ごろの剣道稽古の環境がナショナルチーム選手たちより厳しいことを反映している結果であると考えられる。

3.5. 剣道に関わる雰囲気

「剣道の道場は，気持ちが引き締まるような雰囲気を保つべきである」と「剣道の試合では，鳴り物によるにぎやかな応援を認めるべきだ」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.001$，$p < 0.05$)。しかし,「剣道を続けている人は堅苦しい雰囲気がある」という項目については，有意差は見られなかった。

一般的に剣道は武道としての伝統性や文化性からやや堅苦しいイメージがあり，剣道の道場や試合では独特な雰囲気があるといわれる（大石ほか，2004)。先行研究（金，2007）によれば，韓国の青年（高校生と大学生）は，剣道の道場は気持ちが引き締まる雰囲気を保つべきであると捉えながらも，試合ではある程度のにぎやかな声援を認めるべきであると捉えていた。しかし，経験が長くなると，鳴り物によるにぎやかな声援に対しては，否定的に捉えていた（金，2007)。

今回の結果では，両群ともに，剣道の道場は気持ちが引き締まるような場所であるべきであると捉え，ナショナルチーム選手の方がより肯定的であった。また，鳴り物によるにぎやかな声援に対してもナショナルチーム選手の方がやや肯定的に捉えていた。

ナショナルチーム選手が所属している実業団（2010年，17実業団）の多くは，市庁や区庁の所属であり，実業団では何より試合の結果が重視される。なお，毎年10月に行なわれる全国体育大会（韓国の国体）の試合の結果により剣道実業団の存廃が決められることもある。そのため，応援が過熱する傾向がある。また，大学剣道連盟の剣道大会ではにぎやかな応援を禁止しているが，韓国実業剣道連盟の剣道大会ではにぎやかな応援を認めている。このような現状から，ナショナルチーム選手は，剣道の道場を人間形成を目的とする修業の場所であると捉えながらも，剣道の試合ではにぎやかな応援を認めるなどのねじれ現象を起こしていると考えられる。

3.6. 上下関係

「剣道を行なう人は，年齢の上下関係を重視している」と「剣道を行なう人は，段位の上下関係を重視している」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.001$，$p < 0.05$)。しかし,「剣道を行なう人たちは，身分（肩書）の上下関係を重視している」という項目については，有意差は見られなかった。

先行研究によれば，韓国の剣道界では段位より年齢の上下関係を重視しており，その傾向は剣道の経験が長くなるほど肯定的である（Kang, 2003；金，2007)。今回の結果は, 先行研究と同様であり, 両群ともに,「年齢, 段位, 身分」の順に重視しており, ナショナルチーム選手の方がその傾向はより高かった。

韓国は儒教精神の影響を強く受けており，年上の人に対する礼を大事にしている。大韓剣道会はその精神を継承している（Kang, 2003)。また，韓国は兵役制度（２年間）があり，韓国の男性は誰にでも兵役に行かなければならない。その軍隊では上下関係がより重視される。今回の調査対象を平均年齢から考えると，ナショナルチーム選手（28.5±3.04歳）のほとんどは兵役を終えており，大学選手（22.0±1.03歳）のほとんどは兵役を終えていない。今回の結果は儒教精神と兵役制度に影響を受け,「年齢」という上下関係の捉え方に強く反映していると考えられる。

3.7. 剣道の伝統的な教えや習慣

「剣道の教えや理論は，古くて理解できない」と「剣道の伝統的な気風や習慣は，そのまま伝承すべきである」という項目について，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$，$p < 0.001$)。

大石ほか（2004）によれば，高齢者は剣道の伝統的な教えや風習に魅力を感じており，それが剣道の継続要因でもあると報告している。また, Rhee（1983）は，韓国にも武士道精神（新羅の「花朗道精神」）が存在し，その精神は今日の韓国国民に受け継がれているとして

いる。また，韓国の青年は，剣道の伝統的な教えや習慣に魅力を感じ，剣道は受け継がれるべきであると捉えていたという報告もある（金，2007）。

大韓剣道会は，昇段審査の中に国際剣道連盟（FIK）加盟国の中でも独自的なものを取り入れている。それは新羅の武士集団である花朗たちの伝承と伝われる「本国剣法」である。その「本国剣法」は大韓剣道会副会長である李氏により1983年に復元され，1992年から昇段審査の中に導入している。今回の結果は，伝統を重んじる大韓剣道会の普及方針が深く関わっていると考えられる。しかし，大韓剣道会が導入している伝統や伝承，即ち，「本国剣法」や「朝鮮勢法」の教えや理論については否定（大学選手）及びどちらともいえない（ナショナルチーム選手）と捉えており，伝統や伝承に対する大韓剣道会の今後の課題を示していると考えられる。

3.8. 剣道のルール

「剣道の有効打突（一本）の判定は，観る人にとってわかりにくい」という項目については，大学選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$）。「剣道のルールは，難しくて理解できない」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に否定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$）。

先行研究によれば，剣道の「有効打突」の判定や「ルール」は，剣道経験がない者にとっては理解しにくいものの，剣道経験が長くなるほど，十分に理解できると捉えられていた（草間，1993；金，2007）。今回の結果では，剣道経験がより長いナショナルチーム選手の方が剣道の「ルール」や「有効打突」の判定についてより理解をしめしていた。

このことは，剣道経験が長くなるほど，剣道のルールや有効打突（一本）の判定に対する理解が増すという先行研究（草間，1993；金，2007）の結果を裏付けるものであると考えられる。

3.9. 剣道の普及策

「剣道をオリンピック種目にするように働きかけるべきである」，「剣道は子供の時代から多くの人たちに広めていくのがよい」，「剣道をもっと外国に広めていくべきである」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.001$，$p < 0.001$，$p < 0.001$）。先行研究によれば，剣道のオリンピック種目化について日本の大学生は反対しており，韓国の大学生は大いに賛成している（岩切ほか，2000）。また，日本の青年（高校生と大学生）は剣道のオリンピック種目化を否定的に捉えているのに対して，韓国の青年は剣道のオリンピック種目化に大いに賛成していると報告されている（草間，1993；岩切ほか，2000；金，2007）。今回の結果は先行研究と同様であり，両群ともに，剣道をオリンピック種目にし，子どもにも外国にも広げていくべきであると捉えており，ナショナルチーム選手の方がその傾向はより高かった。

このことは，ナショナルチーム選手の方が大韓剣道会の組織との関わりが深いことやナショナルチーム選手のほとんどが実業団を引退してから私設道場の経営者や「学校剣道」の指導者になることなどの影響を受けていると考えられる。

3.10. 剣道の安全性

「剣道は怪我が少なく，安全である」と「剣道での打ち合いは，痛みが強く危険である」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に否定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$）。

先行研究によれば，韓国と日本の青年は，剣道は竹刀を道具とする格闘技であるため，打ち合いは痛みが強く，怪我をする恐れがあると捉えているが，剣道経験が長くなるほど「危険ではない」と捉えるようになる傾向があると報告されている（草間，1993；金，2007）。

大韓剣道会会報第79号によると，「第14回世界剣道選手権大会」のナショナルチーム選手選抜過程は17カ月間16回行われるものであり，約200人が参加する「思い焦がれるサバイバルゲーム」であった。このような厳しい選抜過程から無理に体を動かし，怪我をしてしまうといったナショナルチーム選手選抜過程の現実を表している結果であると考えられる。

3.11. 剣道に対する興味・関心

「剣道の高段者になってみたい」と「剣道を続けたい」という項目については，ナショナルチーム選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$，$p < 0.01$）。「剣道の試合は観る人をひきつける」という項目については，大学選手の方が有意に肯定的な意識を抱いていた（$p < 0.05$）。

韓国では，1988年のソウルオリンピック，同年の「剣道世界選手権大会」，1993年から始まった剣道のテレビ中継，主人公が剣道の達人であるドラマ（1995年「砂時計」）などの影響を受けながら，90年以降，韓国の剣道人口は急激に増えた（大韓剣道会，2003）。そして，現在，1,000を超える私設道場があり，約60万人の剣道人口を有している（Kim，1999；Park，2005；金，2007）。また，先行研究によれば，韓国国民は，他の格闘技（テコンドー系，警護武道系，合気道系，テッキョン系など）と比べ，剣道に対する興味・関心が非常に高いと報告されている（Jeong，1992；Kim，2001；朴，2010）。今回の結果では，両群ともに，こ

れからも剣道を続け，高段者になりたいと考えているが，ナショナルチーム選手の方がより肯定的に捉えていた。

しかし，「剣道の試合は観る人をひきつける」という質問項目に対しては，ナショナルチーム選手の方が大学選手に比べやや否定的に捉えていた。このことは，剣道自体が実業団の他のスポーツ種目と比べ非人気種目であることや，大学剣道連盟が主管する「全国学生剣道大会（年２回，春と秋）」では大学側からの応援団や選手たちの家族が応援に来るなどにぎやかな大会になるのに対して，韓国実業剣道連盟が主管する「韓国剣道実業連盟戦（年３回）」では観衆が少ない現実から影響されたものと考えられる。

４．まとめ

本研究では，韓国「学校剣道」の更なる発展策を検討する資料を得るため韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識の実態について検討した。

韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識は大学選手に比べ，剣道をスポーツ的に捉える傾向がより高かったが，武道の特性ともいわれる人間形成，上下関係，伝統的な気風や習慣，道場の引き締まる雰囲気などについてはより肯定的に捉えていた。また，高齢者と若者とが対等に競い合えるという剣道の特性，安全性，剣道の教えや理論などについては否定的に捉えるものの，にぎやかな応援については肯定的に捉え，また，剣道の普及策についても高く肯定しており，昇段に対する意識が強かった。

以上のことより，韓国における「学校剣道」の普及に関連付けて考えると，一般的に剣道界では人間形成，伝統，上下関係，剣道道場の気持ちが引き締まる雰囲気などを武道的特性として捉えているが，スポーツ的に捉えながらもそのことを追求することができるのではないか。また，韓国においても剣道人口が減少し始めた今日，剣道人口を増やす突破口としては剣道のオリンピック種目化が望まれるのではないか。しかし，「学校剣道」への更なる普及を考えると，剣道のルールや一本の判定，伝統，剣道の教えや理論などをより分かりやすく説明する工夫をするべきではないか。また，「学校剣道」の就職先の一つである実業団の環境改善（結果主義，安全性など）なども求められる。今後は，これらの点についてさらに探求していきたいと考えている。

【引用文献】

安藤宏三，金田安正（1980）ヨーロッパにおける剣道愛好者の意識調査１．早稲田大学体育研究紀要，**12**：48-60.

安藤宏三，金田安正（1981）ヨーロッパにおける剣道愛好者の意識調査２．早稲田大学体育研究紀要，**13**：36-45.

文化体育観光部（2008）生活体育関連法人現況．文化体育観光部：韓国.

大韓剣道会（2003）大韓剣道会50年史．大韓剣道会.

大韓剣道会（2010）大韓剣道会回報84号．大韓剣道会.

大韓剣道会（2003）大韓剣道会五十年史．大韓剣道会：67-192.

濱田臣二（2004）日韓剣道実践者のスポーツ価値志向に関する比較研究．北九州工業高等専門学校研究報告，119-124.

岩切公治，井島章，井上哲郎，朴東哲（2000）韓国における剣道の実態調査．国際武道大学研究紀要，**16**：213-217.

Jeng, Seong Dae (1992) A Research on Understanding of Kumdo for Korean. Graduate School Education of Sung Kyun Kwan University. 12-36.

軸原千恵，湯浅晃，木原資裕，ヴェルラモヴセルゲイ（2005）アメリ人剣道家の剣道に対する意識について．武道学研究，第38巻別冊：27.

加藤純一（2006）日韓剣道技術用語の対比と特徴．目白大学人文学研究，**3**：123-135.

Kim, Hyo Kwan (1999) A Comparative study between the changes of ancient swordsmanship and morden kumdo. Grduate school of Chosun University, 12-13.

Kim, Kyong Tae (2000) The effect of Kumdo practice on the personality formation and the pro-social behavior of teenagers. Graduate school of Education Kook Min University.

Kim, Young Hak (1999) A Study on the Developmental Process of the Sword Art (Kundo, Gumsul) in Korean Sports History. Graduate School of Myong Ji University.

金炫勇（2007）韓国の青年における剣道の捉え方に関する研究．広島大学大学院教育学研究科，修士論文，3-17.

金炫勇・代俊・松尾千秋（2009）韓国におけるナショナルチーム選手の剣道の捉え方に関する研究．日本体育学会第60回記念大会予稿集，230.

金儀信（2009）外国人剣道実践者にみる剣道の伝統的

文化性の理解について－フィンランドにおける剣道を中心として－．東北福祉大学研究紀要，第33巻：319-338.

草間益良夫(1993)青年の剣道に対する意識－高校生・大学生を対象として－．全国教育系大学剣道連盟研究部会，29-52.

大石純子, 鍋山隆弘, 中尾健一郎ら（2004）生涯スポーツとしての剣道に関する一考察－高齢者を中心に－．身体運動文化研究，**11**-(1)：41-55.

朴周鳳（2010）韓国政府による「伝統武芸」の創造－2008年「伝統武芸振興法」の制定をめぐって－．体育学研究，**55**：125-136.

Park, Dong Churl (1999) Educationalandphilosophical Worth of Kumdo Performance and Experience. Graduate School of Sejong University.

Park, Sang Sub (2005) The Relationship between the Practice of Kumdo and the Development of the Sociability of the Youths. Department of Exercise Science Graduate School, Chung buk National University. 5-22.

Rhee, Jong Rim (1983) A study on the History of Ancient Korean Kumdo-Chiefly on the Art of Bonkukkum of Shilla Dynasty-. Graduate school education of Sung Kyun Kwan University.

酒井利信（2009）剣道日本，６月号，スキージャーナル，pp.46-48，2009.

酒井利信ほか（1999）生涯スポーツとしての剣道に関する一考察－家庭婦人を中心に－．トレーニング科学，**11**-(2)：51-62.

Shin, Seung Ho (1984) A Stduy on Values of Kumdo in Physical education of Society. Graduate school education of Sung Kyun Kwan University.

Sotaro Honda (2009) A study of the factors that influenced British university students to continue Kendo. 武道学研究**42**-(2)：29.

Sotaro Honda (2009) A study of Logistical Issues with Refereeing in the Internationalization of Kendo－with the focus on the European Kendo Championships－．武道学研究**41**-(3)：2-10.

田中守（2007）剣道における競技と人間形成．国際武道大学紀要，**23**：1-6.

竹田隆一，斉藤浩二，小林日出至郎（2005）剣道の国際化に関する研究：諸外国剣道家の剣道理解と実践の比較から．武道学研究，第38巻別冊：9.

植原吉朗, Alexander Bennett, Michael Komoto（2005）剣道の国際的普及に伴う文化性・競技性の認識変容に関する国際調査の試み. 武道学研究, 第38巻別冊：10.

植原吉朗，朴東哲（2006）剣道の国際化に関わる意識比較：日・韓学生への調査より．武道学研究，第39巻別冊：52.

ヴェルラモヴセルゲイ，木原資裕（2005）ロシアにおける武道（剣道）に関する調査．武道学研究，第38巻別冊：28.

Woo, Seong Son (2001) A Study on the educational values of the Kumdo and its historical development. Graduate school education of Hanseo University, 64-91.

山口明生，金木悟，蒔田実（1983）剣道の国際化について：外国人剣士の剣道に対する意識調査，東海大学紀要，**13**：35～48.

全日本剣道連盟（1994）剣窓スペシャル．財団法人全日本剣道連盟，245-267.